



図書館部の先生方の読書エッセイ、最後は英語科の野村先生です。

今まで一人一人それぞれ違った本を紹介していただきました。皆さんの心に響いたエッセイはあったでしょうか。図書館では皆さんの読書のサポートもしていきます。機会があれば、これからは図書館部以外の先生方にもお願いしていきたいと考えています。次号を楽しみにしてください。

高校生に薦めたい本

『青が散る』宮本 輝

英語科 野村千佳

私にとって文学を読むのは単なる娯楽であって生活の一部である。子どもの頃から、他人の人生に興味があって、登場人物に自分を置き換えて空想するのが好きだった。小学生の頃は『赤毛のアン』や『不思議の国のアリス』を心の友とし、中学生の頃は『アンネの日記』に夢中になり、好奇心旺盛で自分の考えを率直に話す知的なアンネに憧れていた。高校時代は宇野千代の『行動することが生きることである』というエッセイを読んで、情熱を秘めているものの引っ込み思案の自分を変えたいと熱望したものだ。大学時代は文学サークルで、国内外の純文学を巡って仲間と熱く語り、よく飲んだ。大人になってからは男のロマンに魅かれて読んだ、井上靖『敦煌』『蒼き狼』など心に残っている。

今年の夏、この小説を手にとったのは、慌ただしい現実世界からの逃避行だったかもしれない。宮本輝は芥川賞などを受賞している有名な作家だが、まず読みやすい。その上、登場人物が庶民的で感情移入しやすい。『青が散る』

は主人公の燎平が新設大学の一期生として、キャプテンの金子とテニス部を創立するところから始まる青春の群像劇だ。ごく普通の大学生である燎平の目線で、テニス部員を中心とした数々の登場人物たちが不安や苦しみを抱えて青春時代を過ごしている様子が描かれている。仕事と育児に追われる生活とは別世界の、大学時代の青春の日々は私

には二度と戻って来ない。しかし、まだそう遠くない記憶が当時の感覚や空気とともに押し寄せてきて、すっかり大学生に戻った私は登場人物たちと青春を過ごした。

この小説のマドンナである夏子は、誰もが目を奪われる華やかな美人である。そんな夏子に燎平は初めて出会った日からどうしようもなく魅かれていく。夏子は神戸の有名な洋菓子店の一人娘で、自信たっぷりでぜいたく好きで、自由奔放な性格だ。そんな夏子の自分勝手にわがままな性格こそ、燎平にとっては美貌にも代えがたい

青春の苦しみ『青が散る』野村千佳

美点だった。夏子の方もまた、父の葬儀を済ませた夜に突然燎平を電話で誘い出し、帰りに頬にお礼のキスをするなどと思わせぶりな態度をとる。二人は互いに想い合っているように見えるのだが、いつまでたってもつかず離れずの関係に留まっている。

たしかに、恋愛で一番おいしいのは、恋人同士になるまでのお互いの気持ちがわからない時期だ。恋が実るまでの不安定な時期が苦しくもあるが、そのドキドキ感がたまらない。私の大好きな荒井由実の『14 番目の月』の歌詞に、「次の夜から欠ける満月より 14 番目の月が一番好き」とある。「愛の告白をしたら最後そのとたん、終わりが見える。言わぬが花、その先を言わないで」という歌詞に実感を込めて納得してしまう。

燎平は真剣に夏子を愛しているのだが、彼女を自分だけのものにする自信がなかった。燎平には大学で何をやるという目的がないので、誘われるままにテニスの練習を続けているだけだった。燎平は夏子がいつか危険な恋に走り出してしまわないかという予感を抱いていた矢先、夏子は婚約者のいる男性と駆け落ちしてしまう。

婚約者がいるからこそ好きになってしまうというのが刺激を求める夏子の性である。夏子は燎平のことをただの男友達とは思っていないが、恋人とも思っていないと言い放つ。そして、その駆け落ちした男性との親密な関係を赤裸々に語り、燎平の嫉妬心をあおるといった憎たらしさがある。夏子のような女性は衝動的に行動し、走り出したら自分でも止められない情熱の持ち主なのだろう。そして、彼女が情熱を傾けるのは恋愛の始まりから成就までであり、実った後は急に冷めていくタイプなのだろう。安定を好まない性質だから、燎平との恋の駆け引きを楽しんでいるように見える。同性から見ると妬ましくも感じられる夏子だが、彼女にも自分ではどうにもならない影の部分がある。その弱さや影の部分に男たちがみな虜になってしまうのかもしれない。

この小説の面白さは燎平と夏子との関係だけではなく、多くの人物の間の友情や恋愛関係が生き生きと描かれている点だ。夏子とは違って際立った美人ではないが、控え目で誰からも好かれる良妻賢母型の祐子という、もう一人のヒロインがいる。燎平は祐子を「羽根布団のような女」と表現しているが、夏子にはない祐子の女性らしい情熱に触れ、心と恋のような感情を抱くこともあった。テニス部員の男子たちから慕われている祐子は、結局、誰に恋心を抱いているのか秘めたまま、突然大学を途中でやめてアメリカ勤務の医師と結婚して渡米してしまう。しかし、結婚後、夫との平穏な生活を保ちながらも、実は学生時代からずっと好きだった相手を想い続けていたのである。このあたりからは大人の世界である。

関西弁での屈託のない会話が時に笑いを誘い、テニスの長い死闘に熱くなり、仲間の突然の死に絶望し…、もちろん恋愛に胸を焦がし、ぜひ青春の光と影を見つめてほしい。耐久図書館に新装版、入ってます。

